HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スクールカウンセラーは学校現場において一次予防に対しどのように寄与できるか
Author(s)	三浦, くるみ; 渡邊, 誠
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 7, 25-62
Issue Date	2025-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.7.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94637
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_2434-7639_7_25-62.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院臨床心理発達相談室紀要　第７号　p.25～62

スクールカウンセラーは学校現場において一次予防に対しどのように寄与できるか

三浦くるみ*・渡邊　誠**

How can school counselors contribute to primary prevention of psychological problems in schools?

Kurumi MIURA, Makoto WATANABE

要　旨

学校における心理的問題の一次予防へのスクールカウンセラー（SC）の寄与について、SCを対象とする質的研究を行い、その結果に示された現状を踏まえて考察を行った。SCの一次予防活動は、教師との関係づくり、宣伝活動、コンサルテーションが主要なものであり、後方支援的な色合いが強かった。勤務時間の制約が大きく、学校側の要請により三次予防である面談業務が大半を占める中で、一次予防活動はかなり困難な状況ではあるが、様々な工夫により行われていた。SC業務の多忙化は甚だしく、SCの常勤化が強く望まれるが、現状ではこれらの工夫を積み重ねてゆく地道な活動が、一次予防を促進するものと思われた。

キーワード：一次予防、スクールカウンセラー、教師との関係づくり、宣伝活動、コンサルテーション

Key words：primary prevention，school counselor，relationship building with teachers，advertising activities，consultation

1．序論

1-1　スクールカウンセラーについて（以下SCと表記）

SCの制度

文部科学省（2015）は「SC制度は、平成7年9月から実施され、実施当初は各都道府県に小中高各1名ずつ、計3名が配置された」とし、同年に起きた阪神淡路大震災による多大な被害を受けていた兵庫県には「心のケア」のため追加SCが配置された。また、「近年のいじめの深刻化や不登校児童生徒の増加など、児童生徒の心の在り様と関わる様々な問題が生じていることを背景として、児童生徒や保護者の抱える悩みを受け止め、学校におけるカウンセリング機能の充実を図るため、臨床心理に専門的な知識・経験を有する学校外の専門家を積極的に活用す

* 北海道大学大学院臨床心理学講座修士課程

** 北海道大学大学院教育学研究院准教授

る必要が生じてきた」という背景から、全国配置を目指し、平成18年度には全国で約1万校に配置・派遣されるに至った（文部科学省　2015）。また、平成13年度からは、各都道府県等からの要請を踏まえて、全国の中学校に計画的に配置することを目標とし、その成果と課題等を調査研究するためSC活用事業補助を開始し、都道府県等がSCを配置するために必要な経費の補助を行っているなど、学校におけるカウンセリング機能の充実が図られてきた。

SCの役割

SCの役割について、文部科学省（2015）は以下の表1のようにまとめた。

表1　SCの役割（文部科学省(2015)『2. スクールカウンセラーについて』から引用）

1. 児童生徒に対する相談・助言
2. 保護者や教職員に対する相談（カウンセリング、コンサルテーション）
3. 校内会議等への参加
4. 教職員や児童生徒への研修や講話
5. 相談者への心理的な見立てや対応
6. ストレスチェックやストレスマネジメント等の予防的対応
7. 事件・事故等の緊急対応における被害児童生徒の心のケア

SCは中心的な業務として相談面接を行う一方で、研修や授業参加、教職員のメンタルヘルスのケアなど、その他の多くの業務も求められているとしている。

SCの現状と課題

現在SCは臨床心理士が8割以上を占めているとされているが、2018年から公認心理師制度が始まったことにより、公認心理師資格を有するSCも増えている。公認心理師法第2条では、公認心理師は①心理査定②心理面接③関係者への面接④心の健康に関する教育・情報提供活動の4つが業務として定められている。今後公認心理師の資格を有するSCの増加につれ、相談業務や学校問題の対応だけでなく、生徒や教師の心の健康を保つための予防活動も期待される。

文部科学省（2015）はSCの課題として、その活用の仕方に、教員や校内組織のあり方、校長を始めとした教職員の意識の差等により、学校や都道府県等によって大きな差があること、教職員とSCとの連携の不十分さ、その役割が理解されていないこと等により、組織的な活用が十分になされていない場合、教育委員会においてSCをどのように活用するかについての見解や方針が明確でない場合、などを挙げている。

1-2　一次予防について

一次予防の起源

Caplan（1970）は医療や公衆衛生の分野において行われていた予防の概念を精神医療に取り入れ、3つの段階に分類した。Caplanは一次予防を「病気を生み出す機会が生ずる前に有害な環境を防止することによって、地域住民が新たに精神障害にかかる事例の比率を一定期間引き

下げるもの」と定義した。一次予防の対象は全ての人であり、ある集団内において問題が新たに発生しないようにすること、また、その問題の発生率を減らすことを目的としている。一次予防の具体例として、市民講座などの啓発活動、健康教育、予防接種などが挙げられる。このCaplanの予防の水準を参考に、問題の発生を予防することを一次予防、問題の悪化を防ぐことを二次予防、問題による二次的な社会的不利益を防ぐことを三次予防と分類したコミュニティ心理学が登場した。

コミュニティ心理学は1965年のボストン会議で初めて登場した言葉であり、個人と環境の相互作用を重視するものである。山本（1986）は、「コミュニティ心理学とは、様々な異なる身体的心理的社会的文化的条件をもつ人々が、だれもが切りすてられることなくともに生きることを模索する中で、人と環境の適合性を最大にするための基礎知識と方略に関して、実際におこる様々な心理社会的問題の解決に具体的に参加しながら研究をすすめる心理学である」と定義した。またMurrayら（1987）は、Caplanの定義を参考にしつつ一次予防を問題の発生を予防することとし、さらに一次予防を「一般的な予防（universal prevention）」と「選択的な予防（selective prevention）」と分類した。一般的な予防とは、児童生徒の全員を対象に行う心理教育などが挙げられる。また、選択的な予防とはハイリスクの子どもたちを選んで行う心理教育のことを指す。

学校という現場も一つのコミュニティであり、生徒を取り巻く環境の中でどのような支援を行うことが出来るかを考えていくSCの役割や活動と通ずるものも多く、現在は教育現場でも予防の概念が導入されている。

教育現場における一次予防

谷口（2007）は教育分野において予防的な介入について以下の表2のようにまとめた。谷口によると第一次予防は健康な児童生徒を健康なままに保つことを目的としている。方法は学校での生活環境に働きかけて発達を促すか、児童生徒が将来出会うであろう様々な困難を乗り越えるための能力を高めること、を挙げている。

表2　予防の水準（谷口，2007）

水準	目的	対象	援助者
第一次予防	児童生徒の健康を保つ	健康な児童生徒	学級担任が中心
第二次予防	問題が生じることを未然に防ぐ	ハイリスクな児童生徒	学級担任、養護教諭、SC
第三次予防	できる限り正常な生活に戻ることを援助する	問題が生じ、現在も継続している児童生徒	SC、教育相談係

また､コミュニティ心理学に基づいて学校という場での支援について論じた伊藤（2007）は、学校では個人の治療だけでなく、子ども集団全体という環境からの予防や接近が可能であると述べている。

学校心理学における一次予防

学校心理学において石隈（1999）は援助ニーズの大きさに焦点を当て、一次的援助サービス、二次的援助サービス、三次的援助サービスの3段階に分類し、それぞれの支援を論じた（図1）。石隈は、一次的援助サービスは全ての子どもを対象に行われるものであり、促進的・予防的援助、日々の関わりと行動を通じて能力の開発、集団への援助（入学時の適応、対人スキルの向上など）である、とした。また、石隈は、一次的援助サービスにおいてはSCの役割は大きく、学校組織や教師に対するコンサルテーションや子どもたちの個別ニーズの評価を行う事ができると述べている。

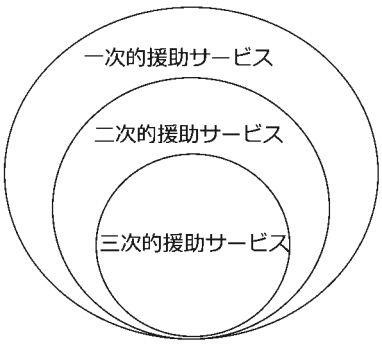

図1　3段階の援助サービス（石隈，1999）

本研究での一次予防とは

以上に示した一次予防概念の歴史などを踏まえ、本研究で用いる一次予防を定義する。本研究での一次予防とは、「学校で起こり得る問題発生を防ぎ、すべての児童生徒の心の健康を保つことを目的とした活動や取り組み」とする。なお、SCの支援活動は児童生徒のみならず、保護者や教職員、学校全体の評価なども含まれる。そのため支援対象は、児童生徒を中心としつつ児童と関わりのある人たちも含まれ、児童生徒の心の健康につながる活動すべてを一次予防であると考える。

1-3　先行研究

SCへのニーズ

教師からSCへのニーズについて調査を行った荒木（2007）は、SCへのニーズとして、カウンセリングなど生徒に対する直接援助、コンサルテーションなど教師に対する間接援助、カウンセリングなど保護者に対する直接援助、教師・生徒・保護者の間のコーディネーションを行う橋渡し役、の4つを挙げた。その中で、学習面、学校組織、予防的支援のニーズについて、教師はSCの関与の必要性を感じつつ、SCの勤務時間の制約により実現は難しいと認識していた。さらに荒木（2008）は、教師は予防を目的としたSCの取り組みでは、人間関係づくりのスキルやストレス対処法に関する心理教育に、高い期待を持っていることが示されたと述べている。

教師とSCの協働

教師とSCの協働について、伊藤（1999）は、スクールカウンセリング活動のさらなる充実のためには、学校の受入体制を改善する方策を通じて、SCと教員の連携をさらに深めることが重要であるとした。教員とSCの協働促進要因について調査した田中（2010）は、「教員側の要因」「SC側の要因」「教員-SC間のコミュニケーション」「相互信頼感」の4つの大カテゴリーを抽出した。その中で田中は、日常場面でのさりげないやりとりの中でのコミュニケーション

は、SCと教員双方が限られた時間の中で信頼関係を築いていくためには欠かせない要素であると考えられるとし、会議などのフォーマルなコミュニケーションに加えて、雑談などのインフォーマルなコミュニケーションの重要性について述べた。土井・加藤（2011）は「SC積極活用プログラム」を作成し、「相談行動」「協力して行う問題解決行動」の2つを中心にSCの職務内容の明確化を試み、その効果を検討した。プログラムに沿って介入した結果、SCと教員の連携を促進するためにはSCの職務内容の明確化をすることが有効であることが示された。

予防支援に関する先行研究

小高（2021）はSCを対象に「活動状況」「対応スキル」「予防への期待」の評価の調査を行った。その結果、一次予防に対する取り組みの「予防への期待」は高く評価されつつも、活動自体が少なく、できると明確に意思表示をしたSCが少なかった。小高はデータからSCは一次予防に関して知識としては持ち合わせているものの、実際の活動経験の少なさから明確に意思表示が出来なかったのではないかと示唆している。SCが行う一次予防プログラムの提唱については、構成的グループエンカウンター（鈴木ら　2005）や、学級運営に対する予防・開発的支援として「教師用RCRT」を用いたコンサルテーション（伊藤　2005，三島　2006など）が挙げられているが、日常的な業務における一次予防支援を明らかにした文献は見受けられない。

以上の先行研究から、教師や学校にはSCの一次予防活動に対するニーズがあるものの、実際の学校現場でSCが行うことのできる一次予防の活動は明確でないことがわかる。また、職務内容を明確化することでSC活動の幅が広がることや、教員や生徒のニーズに対応できることも示唆されている。

2. 目的

本研究では、SCが学校の現場で一次予防に対しどのように寄与できるかを明らかにする。SCの行っている業務のうち、一次予防活動に当たるものを抽出することを試みる。一次予防活動が出来ない場合は、その阻害要因についても併せて考察する。

3. 方法

調査の実施時期と対象者について

インタビュー調査は2024年7月下旬から8月上旬の間に実施した。

研究協力者は日頃から教員とのコミュニケーションを重視していると自認していることが事前に確認できたSC3名とした。3名（順にAさん、Bさん、Cさん）の概略を表3に示す。

表3　研究協力者の概要

名前	性別	SC経験歴
Aさん	女性	11年
Bさん	女性	21年
Cさん	男性	22年

SCの活動や制度に対する教師の評価を調査した吉澤（2009）は、教師とSCにとってコミュニケーションを図るための雑談は重要な意味をもち、良好な関係を築くために必要不可欠なものであると述べ、SCと雑談をよくする教師は生徒のことについてもよく相談することを示した。

教師との雑談は、生徒に関する相談による問題の早期発見につながるものであり、一次予防活動の一つと考えられる。教師との日常的なコミュニケーションを重視しているSCを調査することで、他の一次予防活動についても知ることができ、SCの一次予防活動への寄与を明らかにできるのではないかと考えた。SCへの研究協力依頼は、北海道大学教育学院教育臨床心理学ゼミ内および共同研究者の個人的つながりを用いて行った。

調査手続き

同意が得られた研究協力者に対して、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。所要時間は1人60分程度であった。インタビューは研究協力者の同意を得た上で、オンラインの場合はZoomのレコーディング機能、対面の場合はICレコーダーを用いて録音した。またインタビュー中は、適宜メモを取った。

インタビュー内容

インタビューの具体的な質問項目を表4に示す。吉澤（2009）や石川（2015）を参考に、コミュニケーションに関する質問項目を作成した。また、SCの日常的な活動から一次予防が見出される可能性も考慮し、直接一次予防について聞く前段階として日常的な業務に関する質問項目も作成した。初めにSC自身についての質問を行い、次に勤務した経験のある学校について語ってもらった。最後に、一次予防についての印象や実際に行っている活動について聞いた。

表4　インタビューガイド一覧

1. SCとしての経験歴（今まで何校の経験があるか、小、中、高のどれかなど）
2. SCの1日（タイムスケジュール）
3. 基本業務について
4. SCの勤務形態（学校へ行く頻度、掛け持ち等）
5. 勤務していた学校の校風について
6. 教員や生徒とのコミュニケーションについて
7.「一次予防」と聞いての印象について
8. 一次予防を行っているかどうか、具体的な支援について

9. こんな一次予防をしてみたい、などはあるか
10. 一次予防について、意義や必要性は感じるか
11.（一次予防が）出来ない理由があれば、それは何があるのか
12. どのような条件があれば一次予防を行う事が可能となるか
13. 小中高によって一次予防のアプローチは変わるかどうか

本研究は半構造化面接によるインタビュー調査のため、研究協力者の返答に応じて質問の順番を入れ替えたり、その場で浮かんだ質問などを加える等の方法で実施した。

倫理的配慮

本研究は北海道大学大学院教育学研究院令和6年度研究倫理委員会の審査・承認を受けた(受付番号：24－06)。

データの分析方法

インタビュー内容は、録音とメモを元に逐語録化し、インタビュー内の個人の特定につながり得る個人名や固有名詞等は改変又は消去する等した後に、研究協力者に確認してもらった。分析は川喜田（1970）のKJ法を参考にして行った。KJ法とは川喜田二郎によって開発された発想法であり、データそれ自体に語らしめつつ、それをどのように啓発的にまとめたらよいか、という問いから考案されたものである。

具体的な手順についてはKJ法のクイックマニュアルを作成した田中（2012）を参考に以下の手順で分析を行った（表5)。

表5　KJ法の手順（田中（2012）を参考に作成）

①ラベル作り…逐語録などのデータをラベル化する。一つのラベルには一つのメッセージが読み取れるようにする。
②ラベル拡げ…広い机や床にランダムに広げる。
③グループ編成…小グループを作成し、表札を作る。中グループ、大グループと解釈可能なグループ数になるまでグループ編成を行う。
④空間配置、図解化…模造紙の上に解釈しやすい順に配置し、関係を線で結ぶ。
⑤文章化（叙述化）…論理的な矛盾やデータからの解釈の逸脱に注意を払いつつ解釈を行う。

本研究の目的は、研究協力者の語りにもとづいて、学校現場でどのような一次予防活動が可能かを明らかにすることである。KJ法を用いることで、質的データの情報量が膨大であっても図解化による情報の明瞭化により結果をまとめることが容易になり、また、特定の教育現象を詳細に記述することが可能である（田中　2010）と判断した。なお分析結果の客観性を確保するため､著者らの所属する大学院教育臨床心理学ゼミ内の院生と教員で分析を行うとともに、空間配置や図解化についても検討した。

4. 結果と考察

インタビューの調査結果

川喜田（1967，1970）のKJ法を参考に分析を行った。その結果、463個のラベル、83個の小グループ、23個の中グループ、9個の大グループが抽出された（表6参照。●は、その項目が語りの中に出現した研究協力者を示す）。大グループごとに区分し、中グループ、小グループそれぞれに研究協力者の語りをまとめて、SCの活動の中で一次予防として寄与できる点について考察する。なお、「」で括り斜体で示したものは研究協力者の実際の語りである。「I」は筆者を示す。会話の中で研究協力者が笑って語った部分を（笑い）と表記し、補足で説明するものは（）で示した。前後にグループと異なる話題が展開されている場合は「…」で示し、(中略)（後略）などで一部省略を行っている。ここでは、大グループを【 】、中グループを《 》、小グループを< >で示した。

表6　KJ法でのグループ編成の結果

大グループ	中グループ	小グループ	A	B	C
①SCの日常業務	SCの勤務形態	SCの勤務時間について	●	●	●
		SCの現在の勤務校	●	●	●
		SCの経歴	●	●	●
	SCの業務内容	ミーティングで情報共有をする			●
		SCのコンサルテーション活動		●	●
		学校全体のアセスメントが重要		●	●
		SCの1日のスケジュールについて	●	●	●
		学校間の移動について	●		
	相談業務について	中学校では面談活動がメイン		●	
		小学校で行う相談の形態について		●	
		SCが保護者に向けて行う面談	●		
		臨時の相談活動がある	●	●	
	心理教育	保護者に向けての授業を行う		●	
		生徒に向けて授業を行う	●	●	
		先生向けの研修を行う	●	●	●
		中1ギャップに対する保護者や先生に向けての説明			●
		SCの働き方や活動は様々である	●	●	
		学校側のタイミングやニーズによって活動が決まる	●		●
②SCの個人要因	SCの子どもたちに対する理解	小学生又は中学生に対するSCの理解		●	
		SCの高校生に対するイメージや理解	●		
		中学生が不安定になる時期			●
		中1ギャップを感じる子たちの特徴			●
	SCの先生に対する理解	SCの先生に対するリスペクトや考え方			●
		先生同士の繋がりを把握、理解する			●

	具体的な問題に対する対応や理解	不登校の子どもたちの特徴	●	●	●
		不登校生徒との関わり方	●	●	●
		いじめに対するSCの活動や関わり方	●		●
	SCが行っている工夫	先生とお話するための工夫		●	●
		SCが行う授業のやり方や工夫	●	●	●
		面談を行う時の工夫	●		●
		SC活動を行っていて感じること		●	
		SCの持っている資源	●		
③学校関係者との関わり方	担任の先生との関わり方	先生への報告の方法	●		
		SCと先生の信頼関係		●	
		先生がいないときの対応方法	●		●
		担任の先生からのアクションは様々		●	●
	管理職との関係	教頭先生との関係は大きい		●	
		校長先生との関わり		●	●
		SCに対する学校の配慮	●		●
	養護教諭との関わり方	養護教諭は情報通	●		●
		養護教諭とSCの関係性について	●	●	●
	教職員以外の支援者との関わり	SCと相談支援パートナーのそれぞれの役割			●
		SCと関わる人との連携について		●	
		SC以外の心の支援者の種類	●	●	●
④SCの居場所	相談室以外での活動場所	別室登校の部屋の確保	●		●
		心の教室の過ごし方について			●
	SCの机事情	SCの机事情の現実	●	●	●
		職員室に机があると嬉しい		●	●
⑤一次予防の具体的な活動	学校の中をうろうろ歩き回る	「気になる子」を見つける			●
		学校のクラスの様子を見て回る	●	●	●
		休み時間の過ごし方			●
	積極的なSC活動	学校行事に参加する	●	●	●
		SCの認知度を上げる宣伝活動	●	●	
		掲示物を作成する	●		
		給食を一緒に食べる		●	
	二次・三次予防に繋がる声掛け	SCに相談が持ち掛けられる	●		●
		SCが担任に声をかける		●	●
	学校以外での交流	飲み会に参加する		●	●
		年賀状の送り合い	●		
⑥一次予防の阻害要因	SCの抱える時間的制約	SC活動ができる時間	●		
		SCの勤務時間が短いと感じている	●	●	●
		行事があってもSCは参加ができない			●
		勤務日の間に起こること	●		

	先生とコミュニケーションを取ることが難しい	先生も時間がなく忙しい	●		
		先生が職員室にいない	●		●
	SC活動の限界	SCが関与できない		●	●
		SC活動の効果が届きにくい	●		
		一次予防より三次予防の方が求められている			●
	支援者同士の理解の差	SCも千差万別			●
		先生や相談支援パートナーとの考え方の差			●
	学校の規模による違い	大規模校と小規模校のクラス替えについて	●		
		小規模校に対する印象	●	●	
		小規模校・大規模校で行っている活動	●	●	
⑦学校の制度		学校の物理的な構造	●		●
		学校間による違い		●	●
		高校のシステムについて	●		
⑧一次予防の印象		一次予防に対するプラスのイメージ		●	
		一次予防の優先度は低い			●
		SCの考える一次予防		●	●
		学校の現場では出てこない言葉	●		
⑨今後行いたい活動		余力があればやりたいこと	●	●	
		授業を行うときにやりたいこと	●	●	
		研修を増やしたい			●

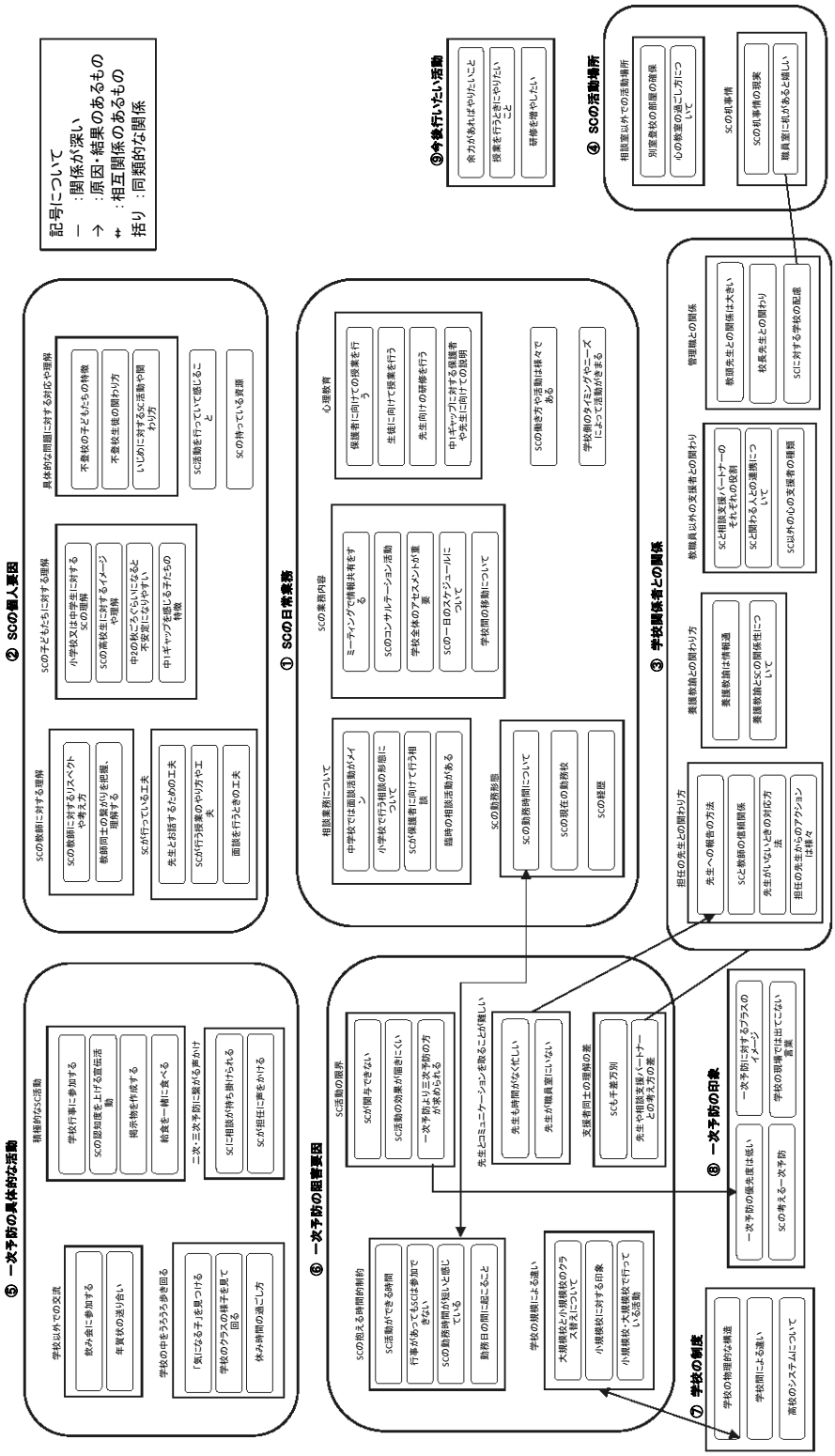

図2　KJ法による分析結果の全体図

1．大グループ①【SCの日常業務】

大グループ【SCの日常業務】は4つの中グループと18の小グループで構成されている。

1-1《SCの勤務形態》

＜SCの現在の勤務校＞

現在、Aさんは中学校2校と小学校5校に加え、私立の高校に週2回勤務されている。Bさんは現在小学校1校を担当し、週に1度4時間の勤務で午後に行っている。また、Cさんは現在中学校1校に勤務されている。

＜SCの経歴＞

Aさんは小中学校、高校いずれも経験があり適応指導教室にも月に1、2回行っている。Bさんは小中学校中心の勤務である。Cさんは小中学校､高校の経験があり､SCのスーパーバイザーの経験もある。また、Aさんは以前民間の精神科の病院の職員だったが、後にパートタイムの仕事が可能であるSCの仕事に就いた。全員がどこか1つだけの学校に勤めているのではなく、何校も掛け持ちしている。

＜SCの勤務時間について＞

Aさんは小学校が月に1度の4時間勤務、中学校は月に2回の4時間勤務である。Bさんは小学校で4時間の勤務、Cさんは中学校で7時間の勤務である。

Aさんは、高校が私立と公立とでは勤務時間が異なることについて「…*公立の高校だともっと少なくて*（中略）*年間40時間*」であり、面談などは「*すぐ埋まっちゃうらしい*」と言う。Aさんの場合、市町村が判断して予算を追加し、勤務時間を増やす場合があるという。

小学校では、AさんとBさんは午前か午後のどちらかの間にしか勤務できないという。中学校については1日に7、8時間の勤務が確保されている。一方で、市町村により勤務時間が決められており、勤務できる日数の制限がある。

1-2《SCの業務内容》

＜SCの1日のスケジュールについて＞

Aさんは午後からの出勤が多い。中学校は午後から出勤、小学校は午前から出勤という。昼休みに面談、授業の合間に可能なら保護者の面談、放課後にまた生徒の面談という、面談中心のスケジュールである。授業を担当する場合は、それを中心にスケジュールを組む。面談の合間に、その報告を担任教員に行う。

Bさんも面談中心で、直近で経験した中学校3校の平均で、一回の勤務につき5件程度の面談であり、少ない学校でも3件という。

Cさんはコマ割の形態で面談を組んでいた。「*毎回1時間目の時間にコーディネーターの先生と，相談支援パートナーと，私が，最少人数で，それ以外に，養護教諭だったり，えー，関連する担任の先生だったりが入ってのミーティング*」を行った後、「（面談に）*10時，11時，12時，で午前中3コマとって，午後からは，1時半，2時半，3時半，で，最後は4時半のコマはえーとほとんど入れないようにして，先生たちにフィードバックするっていう時間にしてますね*」。

また、ケースの入っていないときは心の教室へ行って、相談室登校の生徒と交流するという。

一日のスケジュールは、Aさんはその日や学校によって変わると言い、Cさんはその時々で随分違うという。SCの勤務時間が統一されていないこと、飛び入りなどの即応を要する面談があること、学校による状況の違い、などが関与していると考えられる。

＜ミーティングで情報共有をする＞

「(日常的な) *ミーティングを，あの，構造化出来た学校では朝一のミーティングで生徒指導の情報をばーっと教えてもらって，気になる生徒のことについて，それは不登校に限らずですね。非行とかも，いじめも含めての話ですね。そういう情報を，情報共有して，私の方で少しコンサルテーションしたりとか，っていうそういう感じですね*」といい、その他に、「*学びの支援委員会*」や、「*月に1度いじめの会議*」に参加するという（Cさん)。

＜SCのコンサルテーション活動＞

小学校では教師に対するコンサルテーションはかなり日常的に行っており、保護者の相談に関するものが多いという（Bさん)。また、SCが学校生活の中で生徒と関われる機会は「*圧倒的に少ない*」といい、「*直接関わる人の情報を聞いてそれをどういうふうにこちらが理解するか*」を伝えると述べた（Cさん)。

＜学校全体のアセスメントが重要＞

「*学校全体のアセスメントはどの学校でも常にしている*」といい、「*雰囲気とかね，そういうちょっと非言語的な情報もかなり左右される面もあるのと，*（中略）*自分が話しやすいかどうかっていうのが，中心軸にまずあるのかなって思うんですよね*」（Bさん）といい、SCの話しやすさが、学校の雰囲気によって変化するという。「*学校全体のアセスメントっていうのが，ここは結構私は重要だと思っていて*」（Cさん）という認識もあった。

＜学校間の移動について＞

学校を複数掛け持ちをしていて、「*やたらと移動してるけど勤務時間はそれほどではない*」といい、勤務している学校間の移動時間が長く、実際の勤務時間は少ない現状が示された。また学校の移動に関するトラブルとして、大雪の影響で学校へ行けず、振り替えを行ったことがあるという（以上、Aさん)。移動時間や振り替えによるSCの負担増という問題が認められる。

1-3《相談業務について》

＜小学校で行う相談の形態について＞＜中学校では面談活動がメイン＞

小学校では「*保護者の相談がメイン*」であり、保護者と子どもの同席面接の場合もある。「*小学校では相談室だけ来るっていう子は滅多にいなくて*」との事実があり、「*お話メインのカウンセリングって小学生だとちょっと負荷が高い*」と認識されている。一方中学校は、「*相談室のカウンセリングがメイン*」であり、「*相談の対応で結構いっぱいいっぱい*」であるという（以上、Bさん)。

＜SCが保護者に向けて行う面談＞

「*授業時間の間にできれば保護者の面談を入れるように*」しているといい、生徒に登校時は授業に出てほしいという学校側の要望から､授業のある時間は保護者面接にしているという（Aさん)。

＜臨時の相談活動がある業務について＞

「*飛び入りは，まぁ時々あります*」と、臨時の相談があることが示された（Aさん)。中学校では定期的に相談室に通う生徒に加え、臨時の相談が加わることによって「*自ずと相談件数が多くなる*」という（Bさん)。中学校ではSCは相談業務中心である。

1-4《心理教育》

中グループの《心理教育》は主に①生徒向け②先生向け③保護者向けの3つで構成され、加えて学校問題の一つである中1ギャップについても語られた。

＜生徒に向けて授業を行う＞

「*…まぁ最近増えたのは授業の依頼が，増えましたね*」「*行く時間が少ない分，あの広くSCの周知がてらで*」と言い、中学校で行っている授業内容について「*SOSの出し方とか。ちゃんと困ったとき誰かに相談してねっていう話，を，1年生に*」「*2年生とかだと，人ともめたとき，対立解消するにもまぁやりやすい方法があるよとか，マナーがあるよとか*」「*3年生には，受験ってストレスだよねって，ストレスマネジメントできるようになろうとか*」など、学年ごとに適切な内容を考えて心理教育を行っている。また1年生への授業は「*SCの宣伝がてら*」という目的から、早めの時期に行うことを心掛けている。学校からの「*何か体験するようなものを是非入れてほしい*」という要望に応え、クラスや学年で起こっているトラブルに対して役に立つような「*ネタとして持ってる*」内容を含める等の工夫を行っている（以上、Aさん)。また、「*…ストレスに関する授業を実際に，小学生を対象にやったり*」するといい、生徒にその授業についての感想を書いてもらって、授業内容がどの程度伝わっているかを知り、自分自身が授業を振り返るということをしているという（Bさん)。

＜先生向けの研修を行う＞

各研究協力者が教員向け研修を行っていた。テーマは、不登校や発達障害を持つ生徒への対応の工夫や、合理的配慮（Aさん)、軽度発達障害に関する理解と対応（Bさん）である。また、ある時期に自傷行為が多発することがあり、「*先生たちもびっくりしちゃうし，どうしたらいいのかっていうので，ちょっと研修お願いしますっていうのがあったりする*」（Cさん）という。研修を行う理由については、合理的配慮に関しては保護者からの要望（Aさん)、「*先生たちのその時々のなんか求めているものに応じるってことの方が多い*」（Cさん）と述べられた。

＜保護者に向けての授業を行う＞

PTAが保護者向け講演会を企画してくれたりなどして、ペアレントトレーニングの概要、子どもの感情を育むために家庭でできること、といった内容を話したという。保護者支援に対して、「*顔見せになるだけでもその後の相談関係にはプラスの影響があります。なので，そこは*

積極的にやってきてはいます」と、積極的な姿勢を見せている（以上、Bさん）。

＜中1ギャップに対する保護者や教師に向けての説明＞

中1ギャップについて、「*…できるねって言われてきた子たちが中1になって，やってみたら実はあんまりうまく出来なかったっていって，学校3年間来れなくなっちゃったっていう子とか，そういうことが結構あったりする*」と言い、「*先生たちの期待とか，保護者の期待，本人も自分でできると思っていて，えーと，自分の能力やいろんな面について，あまりわかってなくて，なんでできないんだろみたいなところは結構あったりする*」と述べられている。これは、「*中学校の先生たちって小学校と違ってリーダーシップとれるような子たちを，ある程度なんていったらいいのか…ちゃんと把握して，そういう活動に向かわせるっていうのあるんですね*」と、中学校ではリーダーシップ等の対人的能力の発揮を期待され、保護者も本人も同様の期待を持つものの、小学校までの「できる」生徒にはそれが難しい場合があるという、中1ギャップの一因に関する説明であろう。そのため、「（中学校は）*小学校とは大分違う負荷がかかるっていう事についての説明*」は、必須であると考えている（以上、Cさん）。

1-5《SCの働き方や活動は様々である》

SCの働き方や活動については、「*すごい雑多*」（Aさん）、「*色んな学校のニーズに応じて，スクールカウンセラーって活動の幅が広い*」（Bさん）という。SC業務の活動が幅広いことは利点である一方、業務内容が明示されていないという問題点も指摘された。

1-6《学校側のタイミングやニーズによって活動が決まる》

SCの活動は、「*時期によって*」変わる（Aさん）。また、一次予防活動は「*タイミングですよね*」といい、「*学校が，何を求めているかの方が大事*」「*必要としてることと，提供することはいつも繋がってる*」と、学校側のニーズの把握の重要性が示された（Cさん）。

大グループ①【SCの日常業務】のまとめと考察

SCの日常的な業務の基本は、面談であることが示された。その他の業務内容は多様であり、学校ごとに異なるものも多く、学校側のニーズが優先されている。勤務時間はSCには足りないと感じられており、面談業務のみで終わることがあり得る。SCの行う授業は心理教育であり、学校側のその時々のニーズを把握して行われていた。授業には「*SCの周知*」「*認知度を上げる*」という目的もあった。

これらから、日常業務の中で一次予防を行うためには、心理教育や研修により、生徒、保護者、先生に「*顔見せ*」を行い、相談先の一つとして認知してもらうという地道な活動の必要性が示唆される。一次予防の観点からは、日常業務が面談のみにならない工夫が必須である。一方で、勤務時間が少なくSCの活動がかなり制限される現状での一次予防活動は、学校側のニーズの把握に基づくことが欠かせないように思える。

2. 大グループ②【SCの個人要因】

【SCの個人要因】は4つの中グループと14の小グループで構成されている。

2-1《SCの子どもたちに対する理解》

＜小学生又は中学生に対するSCの理解＞

小学生のカウンセリングは「*お話メインのカウンセリングって小学生だとちょっと負荷が高い，かなり子ども選んでしまう*」といい、心理教育についても「*ストレスっていうものを，たぶん理解するのに，小学校だと5年生くらいにならないと難しいかなぁって思います*」と示唆された（Bさん）。

＜SCの高校生に対するイメージや理解＞

高校でいじめ対策のメール相談を行っているが、高校生はメールを使わないことから馴染む方法ではない、しかし「*先生方お忙しすぎて，そこまで手が回らない*」と、適切なやり方に変える余力が教員にはない、との現状認識が示された（Aさん）。

＜中学生が不安定になる時期＞＜中1ギャップを感じる子たちの特徴＞

中1ギャップについては、【SCの日常業務】＜中1ギャップに対する保護者や先生に向けての説明＞で詳述した。中1ギャップを感じる生徒は「*自分の能力やいろんな面について，あまりわかってない*」傾向があり、中学入学にともなう負荷の増大に対して、出来ると思っていたことが出来ないというギャップから、生徒が不登校に繋がる可能性が示唆された。

「*…中2の夏休み明けが大体不安定になるっていうのがあったりする*」といい、「*中1よりも緊張してなくて中2になって慣れてきている*」ものの、「*発達のバラつきがあるような子たちを小学校から見てる子たちは，同じ学校だった子たちはお世話するんですね，なんとか君とかなんとかちゃんとか言いながらサポートしながらいくけど中2くらいになってくると，もう自分の友達と遊ぶようになってあんまりそういうふうにしなくなってくると，*（発達のバラつきのある生徒は）*孤立して*」きて、「*不登校になるっていうのが割とあったりするかなって。合唱コン辺りとか大体。秋くらいとかですよね，11月とか，そんな時期になってくると，うまくいかないっていう子が結構いたりする*」。また、中学3年生には「*…夏休み終わって部活終わったあととか，秋から冬にかけてとかの辺りで，生徒も，保護者もかなり不安定になったりすることは一般的*」であるという（以上、Cさん）。

中学生活の中には一定のライフサイクルとでも言うべきものがあり、その時々に生じやすい問題への対応が求められることが示唆されていよう。

2-2《SCの先生に対する理解》

《SCの先生に対する理解》は＜SCの先生に対するリスペクトや考え方＞と＜先生同士の繋がりを把握、理解する＞で構成されている。

学校問題に対し「*先生たちは，どんな時に生徒が困ることが多いかとか，不適応起きやすいかっていうことについてのことは多分把握*」しているといい、いじめやSNSなどの問題への対処に関して「*教職員はものすごくスキルが高い*」と認識されていた。また、心理教育について

「…*一方通行の研修は，あんまり得意じゃないのもあるし，そういうのは先生たちのポジション*」であり、教員特有の役割があると、先生に対するリスペクトが語られた（以上、Cさん）。

また，中学校では先生たちが教科や学年など様々な「*学年団*」ごとにチームを形成しており、それぞれの役割である「*校務分掌*」がある（Cさん）。その点を理解することで、SCによる支援がより円滑になるものと思われる。

2-3《具体的な問題に対する対応や理解》

ここでは主に、不登校といじめに関する対応や理解について語られている。

＜いじめに対するSCの活動や関わり方＞

今回は一次予防に関するインタビュー調査のため、いじめの予防の観点から聞いている。

いじめ防止の活動として「*メールの相談を受け付けるとか，ポスターをいっぱい貼ったり*」する活動の経験がある（Aさん）。また、＜中学生が不安定になる時期＞にいじめが起きやすくなり、「（生徒が）置かれた*状況とか負荷のかかり具合とか，そういう時にはこんなことが起きやすい*」ということがあり、生徒の不安定な時期にいじめが起きやすいという傾向を知っているか知らないかだけでも違いがあることを示唆した（Cさん）。中学校に限らず、小学校や高校でも生徒が不安定になる時期は存在すると考えられる。いじめが起きやすい時期があるという理解をしつつ、予防の活動を行うことによっていじめの発生予防に寄与できる可能性があるだろう。

＜不登校の子どもたちの特徴＞

不登校生徒は「*相談室だけ通えるっていうパターンが中学校では多くなる*」一方で、小学校は「*相談室だけ来るっていう子は滅多にいなくて*」（Bさん）という。関わり方の工夫として、面談や登校の前後に他生徒との接触を避けることが行われていた（Aさん、Cさん）。

2-4《SCが行っている工夫》

《SCが行っている工夫》について、研究協力者三人それぞれが、SCの業務を行っているときに意識していることや、実際に行ったことのある活動などを語った。

＜SCが行う授業のやり方や工夫＞

心理教育の授業では参加型の授業形態がとられていた。「*私は必ずあの，参加，ゲーム的なまぁ，アイスブレイクみたいな感じでこう，ゲームをして，ほぐしたりとか，あと，生徒同士でちょっと話し合う場面とか*」（Aさん）、「（授業は）*参加型でやってます。エンカウンターなのでね。ストレスに関する授業と，構成的エンカウングループの授業と，このときやってたんですね*」（Bさん）、「（授業は）*体育館とかで，ですね。パワポで説明して，なんか，実際にじゃあみんなで相談してみて！とかそういうのやるかな。*（中略）*ワークショップ的な感じで，相互交流できるような感じの方が，私はそっちの方がやりやすいですね。*」（Cさん）。

授業は「*2クラスごとに多目的室でーとか，学年でやらざるを得なかったら体育館で*」行い、「*できればクラスごとにやりたい*」が、「*時間の制約があるので，まぁまとめて*」行っている（Aさん）、「*できればクラス，最低でもクラス単位でやりたい*」（Bさん）。理由としては、「*内容的にやっぱりすごく抽象的なことが多くなってしまうので，出来たら人数が少ない方が伝わ*

りやすいなと思っていますね」（Ｂさん）と述べられた。

また、心理教育の内容を「*ネタとして持っていて*」授業を組んでいたり（Ａさん）、授業後にアンケートを取ってコメントをつけて返す（Ｂさん）といった工夫が行われていた。

＜面談を行う時の工夫＞

面談を行う際、学校は生徒を授業に出したいので、昼休み時間や放課後を使って面談をしている（Aさん）。また、小規模校での「*全員面談*」について、「*好きなものはなんですかとか、将来どうしたいと思っていますかとか。そういうまぁあの、リスクの少ない質問をして、色々お話してみるというのを、まぁ全員におんなじ質問するからねみたいな感じで、面談したりしてました*」という。また、何も問題がない場合でも「*こういう人いますよ*」と、SCの周知を目的として全員面談を行ったことがあるという（Aさん）。

保護者のカウンセリングでは、「*不登校になった、保護者のカウンセリングの中では、こっちは話も聞きますけど、環境とか、状況がこんな風に起きてるってことが関係しそうだっていうふうに私が理解したらそれ伝えていく*」（Cさん）と、問題の理解を促す工夫を行っていた。

＜先生とお話するための工夫＞

Bさんは、先生に対して「*なるべくこちらから聞いたりするようにはしています*」と、積極的な姿勢で話そうとしており、「*応じてくれるかどうかは学校の手ごたえ次第*」であり、「*勤務年数とかが長くなればそこの学校での信頼感とかも話しやすさとかもアップしていくので。信頼関係が蓄積されている学校だと、担任の先生から結構気になる子がいるんでっていうので、声かけてもらったりという回数は多くなっていきます*」と語る。勤務一年目の学校では、教頭先生を介して先生方と話すという工夫も行うという。Cさんは常日頃から「*まずは、色んな先生と話せるように、なんでも、なんでも話します*」と言い、話す内容は「*ケースのことだったり、まぁ学校とか学級運営、行事があったりだとか、生徒の対応*」などが多いとしつつも、「*趣味の話したりとか、先生が得意なこととか、あの、教科で持っていても研究してきたこととか、そういうの聞いたりとかって仲良くなってくって感じが多い*」という。また、「*先生たちの時間割*」を把握することによって、先生たちの空き時間に話しに行くタイミングを見つけるという工夫も行っていた。

2-5《SC活動を行っていて感じること》

「*自分のアイデアと学校のニーズとの折り合いでいろんなことが出来るのが仕事の内容としては楽しい*」と語られた（Bさん）。

2-6《SCの持っている資源》

いじめの防止活動の講師を呼ぶ際「*知り合いの先生を紹介する*」（Aさん）と言い、SC個人の縁故から学校での活動が充実することが示唆された。ここからSC同士のつながりも、活動の幅を広げることに寄与する可能性を感じる。また、「*たまたま趣味で手話の勉強をしてた*」ことにより、ろう学校での仕事を得たといい（Aさん）、学校内でもSC自身の趣味等から活動が広がってゆくことはあり得るように思える。

大グループ②【SCの個人要因】のまとめと考察

SCはいじめ、不登校等の学校問題に関して、生徒の特徴理解や適切なかかわり方について、一定のパターンを見出しているように思えた。教員その他の支援者から情報を収集し、問題の理解の仕方について伝えることも行っていた。そのようにパターンを見出してゆくことは、SC自身の実務経験や研修により可能になると考えられる。また活動の中で工夫している点として、面談時間の組み方、心理教育としての授業、先生との積極的な対話、などがあげられた。心理教育としての授業に関しては、抽象的な内容が多く、大人数では理解できない生徒が出てくる等の理由により、参加型で少人数であることが望ましいとされていた。一方で、時間がないため少人数での授業が行えないとも語られており、SCの勤務時間の制約が一次予防に大きな影響を及ぼしている可能性があることが示唆された。

SC自身の趣味によって活動の幅が広がったとの経験は、SCの持つ、スキル、趣味、好きなこと、得意なこと等の資源を学校での活動に生かせる可能性を示していよう。

3. 大グループ③【学校関係者との関わり方】

【学校関係者との関わり方】は4つの中グループと12の小グループで構成されている。

3-1《担任の先生との関わり方》

＜先生への報告の方法＞

面談等について担任や他の先生に報告する際、口頭、メモ、構内用SNSを用いるが、メモは他の先生に見られる可能性があり「*…まぁ万全とは言い難いので*」、守秘に配慮して口頭の方がよいとされた。また、伝える必要があるのに当該の先生をつかまえられない場合、教頭先生に伝言するという（以上、Aさんから）。

＜先生がいないときの対応方法＞

どうしても伝えたいことがある場合はともかく探す、部活動中に呼び出してもらう、学年の先生に尋ねる、など（Aさん）。先生たちの勤務時間割を把握して「*つかまえて話をする*」（Cさん）。先生と連絡を取るのが大変な場合があることがわかる。

＜SCと先生の信頼関係＞

「*…勤務年数とかが長くなればそこの学校での信頼感とかも話しやすさとかもアップしていくので*」あり、「*信頼関係が蓄積されている学校だと、担任の先生から結構気になる子がいるんでっていうので、声かけてもらったりという回数は多くなっていきます*」と、勤務年数と信頼感の関係、信頼感がある場合のメリットが例示された。また、「*…先生たちが職員室内でコミュニケーション取りやすく、先生達の関係性が良い学校は、カウンセラーも話しやすいですね*」と、先生同士の信頼関係がSCと先生の信頼関係につながってゆくことが示唆された（Bさん）。

＜担任の先生からのアクションは様々＞

「*担任の先生から直に見てくださいっていうのは、今はあんまり多く*」なく、代わりに「*管理職がとりまとめて*」依頼されるという（Bさん）。「*…担任持っている先生もなかなか、えーと、*

直接スクールカウンセラーの方に相談しにこなかったりする先生とかもいる」という状況であり、「*授業参観行ったりするんで，その生徒のことについて聞くとかっていうのは割と多いかな*」と、SC側から働きかけて生徒の情報を得たり共有したりする（Cさん）。

3-2《管理職との関係》

《管理職との関係》について、主に校長先生、教頭先生、学校からの配慮の3つに分類された。

＜校長先生との関わり＞

業務の一つとしての授業観察について、「*保護者からの相談申し込みがあって，ちょっと授業の様子見てきますねーって保護者に報告するパターンもあるし，教頭先生とか，校長先生から，依頼があって，ちょっとこの子気になるから見てきてほしいっていうパターンもある*」という。また、学校のシステムをつくるのは教頭、校長であり、「*教育相談部会とか，学びの支援委員会とか，そういった情報共有のオフィシャルな場を作るようにしてるかどうか，っていうのが結構関わってくる*」と管理職の影響の大きさが示された（以上、Bさん）。「*校長先生とかは入学式来れないですかとか，始業式に出てもらえませんかとかって大体とかは聞かれます*」と校長からの式典出席の依頼があるものの、時間の都合上「*合わないことが多い*」という実情もある（Cさん）。

＜教頭先生との関係は大きい＞

「*小学校の場合は教頭先生が窓口になる*」ことが多く、「*一時間くらいは教頭先生と打合せしたり，担任の先生と打ち合わせしたり…*」と教頭先生と日常的な協働がある。また、「(学校の)*システム作りを管理職がしてくれてない場合は，カウンセリングメインになっちゃうと，すごく行き詰っちゃうところもある*」ため、その場合は「*教頭先生に，こういうことやったらどうですかって提案することもあります*」と述べられた（以上、Bさん）。

＜SCに対する学校の配慮＞

会議を「*勤務日に合わせてくれてる*」（Cさん）、「*ちょっと大変なことが起きるとケース会議。うまく学校がSCの出勤日に当ててくれたりしたらそれに出たり*」（Aさん）と、学校側がSCの勤務日に配慮して会議日程を組んでくれる場合がある。

3-3《養護教諭との関わり方》

＜養護教諭とSCの関係性について＞

「(SCが保健室へ行くかどうかは）*学校に，よりますね。まぁあの，親しくしゃべってくれる養護教諭のいる所では結構保健室をうろうろしたり*」「*まぁ雑談多いのは比較的保健室にいる養護教諭は雑談もしやすい…*」（Aさん）、「*うん。毎週行くたびに養護の先生と一時間くらい生徒のお話を聞く学校もあれば，そこまでしないで，教頭先生経由でお話しする学校もあります。*（中略）*すごいグラデーションがあるっていうところですね*」（Bさん）、「*養護教諭はどこの学校でもかなり，あの，こまめに話をしますね*」（Cさん）と、学校による差はあるが、SCの養護教諭との関わりが比較的密接であることがうかがえる。

＜養護教諭は情報通＞

養護教諭は、「*結構いろんなこと、知ってる*」（Aさん）、「*一番把握してます*」（Cさん）と、学校現場の状況によく通じていると、SCは認識している。

3-4《教職員以外の支援者との関わり》

＜SC以外の心の支援者の種類＞

心のサポーター、学習サポーター、心理専攻の大学院生、特別支援教育コーディネーター教員、「*ワンコインボランティアみたいな人*」などが挙げられた。

＜SCと関わる人との連携について＞

「（特別支援コーディネーターの先生と）*円滑にコミュニケーションを取って下さると、活動しやすいです*」（Bさん）と述べられ、特別支援コーディネーターとの連携は、SCの活動にプラスの影響を与えるようである。

＜SCと相談支援パートナーのそれぞれの役割＞

SCが学びのサポーターや先生たちから情報を聞き、意見を交わして行く中で生徒への理解が深まっていくエピソードが語られた。「*ミーティングしているうちに、この子っていうどういう子なんだろう、どういう、どういう、なんなんだろうみたいな感じのことを学びのサポーターさんが言ってくれるので、それに対してもしかしたらこういうことかもねっていうことで、情報を、先生たちもそんな話をすると、もうちょっと気を付けてなんか、進み具合とか学びの、勉強の具合とか、見てみた方がいいかもねっていうと、そういう目でみるようになるので、拾いやすくなる*」。また、「*カウンセラーは大体面接びっしり入れられることが多いので、そこ*（生徒の様子）*は分かんない*」といい、SCには学校での生徒の普段の様子が見えにくい（以上、Cさん）。そのため、学びのサポーターは授業に入って生徒と関わり、SCは学びのサポーターからの疑問や情報に対して見解を示す、という異なる役割をこなしつつ連携し、生徒への理解や支援をより適切なものにしていると考えられる。

大グループ③【学校関係者との関係】のまとめと考察

SCは担任の先生をはじめ、養護教諭、教頭先生、校長先生、学びのサポーターなど幅広い支援者と関わっている。SCの勤務時間に制約があること、先生達も多忙であることにより、充分な情報共有ができない場合もあった。学校関係者の中でも特に養護教諭が学校の事情に通じている場合が多く、養護教諭との積極的な関わりが、SCの学校理解に役立つことが示唆された。また、教頭先生がSCと先生方とをつなぐ重要な役割を担っている。学習サポーターなどのSC以外の心の支援者との関係も、SCの活動に寄与していた。たとえば、別室登校生徒の支援に際しては、学習サポーターとの連携と情報共有が必要であろう。

4. 大グループ④【SCの活動場所】

【SCの活動場所】は2つの中グループと4つの小グループで構成されている。

4-1《相談室以外での活動場所》

＜別室登校の部屋の確保＞

校内に別室登校用のスペースをつくり、学校には来られるが教室には入れない生徒が自習をしたり、出席できる科目の時はそこから教室に行く、といった使い方をしている。そういった「*居場所*」があると、SCは「*顔を出すようにして，そこの生徒と親しくなったり*」という活動の仕方ができる（Aさん）。学校によっては相談室登校とカウンセリングの部屋が同じであり、双方の利用者がかぶってしまうことがある。その場合は、カウンセリング用に別室を用意してもらって対処するという（Cさん）。

＜心の教室の過ごし方＞

相談室登校のための「*心の教室*」に通う生徒とSCが「*一緒にお話するとか，そういうことが多いですね。絵描いたり，ゲームしたりとか。そういうこともやってるときもあったかな*」といい、給食を「*仲のいい子が，クラスの子が持ってきてくれてそこで食べる*」こともあるという（Cさん）。

4-2《SCの机事情》

SC用の机に関する現状は様々である。「*…相談室にこもっていると，全然やり取りできないので。*（中略）*職員室に机ほしいですって誰かと兼用でもいいので机下さいっていうのは行ったとき必ずお願い*」するが、「*用意してくれるところもあります，けど。はい。結構学校によって対応も様々*」（Aさん）、「*今は職員室に相席？その一つの席をALTさんと合同で使うという形で，職員室に出勤…*」（Bさん）、「*…職員室が狭くて先生たちが多い学校は，えーと，職員室に*（SCの）*机がない。それで，えーと心の教室に大体机があるのでそこにいる，そこに行くっていうことが，中学校はそうだったかなって思います*」（Cさん）。

＜職員室に机があると嬉しい＞

「*やっぱり職員室に席が，ある方が活動しやすいですね。圧倒的に。もし相談室にしか席がなかったら，先生とコンタクト取れない，取るチャンスがない。そこを考えるとやっぱり相談室以外に，職員室に相席でも席がある方が，圧倒的にコミュニケーションが取りやすいと思っています*」（Bさん）、「*…担任持ってない先生たちは大体自分の教科がないときには職員室にいるので，お昼も職員室で食べたりするので，交流しやすいですよね。で，職員室に，机があると，授業終わって，帰ってきたとか次空き時間だってときにパッとすぐ情報共有しやすいっていうようなところですね*」（Cさん）。このように、先生との連絡の取りやすさ、情報共有のしやすさの点で、職員室にSCの机があることには大きなメリットがあると言えよう。

大グループ④【SCの活動場所】まとめと考察

現在の学校では、別室登校用の教室がある場合が多く、そこでSCが、教室に行けない生徒と交流する等の活動を行っている場合があった。職員室にSCの机があることのメリットは研

究協力者三名が一致して述べており、考慮されることが望ましい点である。

5. 大グループ⑤【一次予防の具体的な活動】

【一次予防の具体的な活動】は4つの中グループと11の小グループで構成されている。

5-1《学校の中をうろうろ歩き回る》

＜学校のクラスの様子を見て回る＞

「…*空いてる時は授業見に行ったりとか。あと、結構面白いのは小中学校だと掲示物、の観察は面白いですね。*（中略）*描画とか。書道の作品とか、作文とか。あーあと、ちょっと話題になってる子のクラスを覗きに行くとか。目立ってるのかなぁとか、意外と授業では目立ってないんだなぁとか。*（中略）*あと、保護者が来てるところのお子さんの様子を見に行くとか。ちょっと座席を確認して*」（Aさん）、「（小学校は）*勤務時間の3時間の内、1、2件は相談が入っていて、残りの1時間くらいは教頭先生と打合せしたり、担任の先生と打ち合わせしたり、あと、授業観察をしたりしていることが多い*」「…*小学校では、保護者の相談に基づく教師との打ち合わせやコンサルティングが多いです。小学校では、空き時間で授業観察して相談に活かすことも多いですね*」（Bさん）、「（小学校で）*忙しい学校じゃなかった時は、えーと、授業を見てください、落ち着かない子がいるので見てくださいとか、学級崩壊しているので見てくださいとか、そういう時間もありましたね*」（Cさん）。SCが授業を見るという活動は、中高よりも小学校で多い。その中で、展示物、話題になっている子ども、保護者がいる場面での子どもの様子、学級崩壊の状況、などが観察されていた。授業を見ることは、学校からの依頼の場合もあれば、相談に生かす意図でのSCの自発的な活動である場合もあった。SCの現状は面談業務が中心であり、授業観察の時間確保は難しい状況があると思われた。

＜休み時間の過ごし方＞

「…*ピックアップされていない子の中で、いろいろ難しい子たちが沢山いて、そういう子たちを、拾い上げるというか、まぁ手遊びしたりとか、シャープペンシルずーっとこう、ばらしたりする子とかいっぱいいるんですけど、そういう子たちが学習についていけなかったりとか、あるいは対人面でもうまくいかない、移動教室の時に、えーと、不注意で聞いてなくて、皆とそんなにコミュニケーション取れなかったりすると、どこ行ったらいいかわかんないみたいなことがいたりするんですけど、そのあたりは、先生だけではなくて、学びのサポーターさんが、拾いやすい…*」、「*休み時間落ち着かなくて歩いてる子とか、なんか一人でボーっとしてたりとか、ずーっと虫探して歩いてる子とかいますけど、そういうことで、あ、この子、えーとどういう子なんですかって先生に聞きにいって、いやもしかしたらみたいな話になってっていう場合も…*」（Cさん）。先生達から要配慮と認識されていない生徒の中にも、いわゆる「気になる子」は沢山おり、SCがそういった子どもたちを観察して先生に相談する中で、必要な支援へとつながる場合がある。一方、「（生徒に直接関わるのが）*学校生活の中で圧倒的に少ないのがスクールカウンセラーだと私は思いますね*」といい、要配慮の子どもを直接見つけることよりも、「*直接関わる人の情報を聞いてそれをどういうふうにこちらが理解するかっていうことについて伝えていくっていうこと*」（Cさん）が、SCが行える活動のように思える。

5-2《積極的なSC活動》

＜掲示物を作成する＞

「…*勤務予定表を校内に貼っ，貼って，あちこちに貼ってもらったりとか*」するが，「*ふふ，生徒はあまり読まないので。なかなかそれだけでは伝わらないので*」，「…*入学式卒業式向けにお便りを書いたりとか。保護者の方にこういうもの利用，相談室って利用できますよみたいなお知らせのお便り，連絡先とかを配って…*」と、SCを利用しやすくする工夫が行われていた（Aさん）。また、「*相談室便りとかで先生向けのものを作ったり，発行したり*」して、「*心理学的な内容とかをあのピックアップして発信したり*」と、先生がSCに「*なるべく，話しかけやすいように*」なり、信頼関係ができてゆくように配慮されていた。

＜学校行事に参加する＞

「*できる範囲*」で学校行事には参加し、入学式に出席して職員紹介の際に挨拶したり、「*学校祭とかにちょっと顔出してどんな雰囲気かなっていうのを見たり，関わりのある生徒のクラスの装飾を覗いてみたり*」という（Aさん）。また、「…*学校祭とか，卒業式とか，あと運動会とか。そこを観察するっていうのはあります*」と、学校行事に積極的な姿勢を持っている場合（Bさん）や、入学式のステージ上の挨拶や校内放映のテレビ画面からの挨拶を行ったが、面談と重なることが多いためそういった機会はそれほどない（Cさん）という場合もあった。

＜SCの認知度を上げる宣伝活動＞

「（小中学校の勤務時間が）*少ない分，あの広くSCの周知がてら*」授業を行い、「*1年生の授業はまぁなるべく早めの時期*」にする、「*知らないと，相談しようって思わない*」「*地道な宣伝活動は必要*」という（Aさん）。「…*ストレスに関する授業を実際に，小学生を対象にやったり，先生の講演会を企画したりして，スクールカウンセラーの認知度を高めていって活動していく中で関係づくりとかはしてますね*」といい、「*顔見せになるだけでもその後の相談関係にはプラスの影響があります*」と語られる（Bさん）。SCの宣伝を「*こういうところに，こんな内容で相談できます，とか。そこを周知するだけでもすごく意味はあると思っていた*」（Bさん）と評価している。

＜給食を一緒に食べる＞

小中学校で「*給食訪問は，コロナになる前はやっていて，給食の時に，その全クラス回って，あの，自己紹介，スクールカウンセラーだよーっていうのを，皆の前で自己紹介して，一緒に給食を食べて，中学生になると会話は弾まないんだけれど，そういう形で全クラスにお披露目したりっていうのはしてましたね*」（Bさん）。小学校での給食訪問は再開されているというが、生徒と接する機会についてはコロナウィルス感染症蔓延の影響を受けている。中学校で「*会話は弾まない*」のは、「*大人との距離も離れてくる*」故と語られた。

5-3《二次・三次予防に繋がる声掛け》

＜SCが担任に声をかける＞

SCが「気になる子」を見つけると担任に問い合わせ、そこから先生が「*もしかしたら*」と気付いて、相談につながる場合がある（Cさん）。同様に「*こちらからちょっと気になる子が授業観察してて気になる子がいたら、担任の先生にあの、どうなんですかって声かけたりすることもあるし、教頭先生に、こう、あの、今日見に行ってこの子こんな感じだったんですっていう中で、話をしていくこともある*」（Bさん）という。

＜SCに相談が持ち掛けられる＞

養護教諭から「*今日はたまたまSCが来てるからその話聞いてもらいなさい！みたいな感じで回されてくる場合*」があり、「*…ちょっとトラブルがあって、とりあえず保健室に連れてこられた生徒。これはSCが話聞いたらいいんじゃないみたいなこと、ケースをちょっと引き受けて*」ということもある（Aさん）。この場合、相談室と保健室が隣接していたことで、引継ぎが容易になったのだろう。また、「*…初めから落ち着きなかったりとか、いろいろ、不適応傾向がある子なんかはその子に担任の先生が*（事前に）*話をしておいてくれて、私が回ってるときに、この人がスクールカウンセラーの人だよーとかいって、今度なんかあったら相談しなっていう風に言ってくれたり*」するといい（Cさん）、このような形での相談支援の円滑化が図られている。

5-4《学校以外での交流》

＜飲み会に参加する＞

「*インフォーマルなコミュニケーションといえば、飲み会の参加とか。*（*I：おー*）*まぁ、それもやっぱり学校によって色々で、誘ってくれる学校も、全然…*（ない場合もある）」（Aさん）。「*…旅行的行事が、宿泊がありますとか、修学旅行がありますとか、あの、1年生の野外実習があるとかっていうときに、学年ごとで、えーと懇親会、親睦会みたいなのがあって…天気が、悪くならないように、天気上げっていって、あの、晴れになりますようにって飲み会をやって、それで行事が終わったらお疲れ様って飲み会をやるっていう*」ことがあり、SCもそこに参加させてもらい、「*インフォーマルなところで仲良くなったりしておくと話しやすくなったりっていうがあると思います*」（Cさん）との認識を持つSCがいる一方で、SCによっては「*一切出ないですっていう主義の人もいる*」という。一次予防につながり得る学校外での教員との交流に対する認識は様々であるようだ。

＜年賀状の送り合い＞

SCに「*年賀状くれる先生もいる*」、「*大変な数になる*」といい、先生と親しくなることを念頭に、全員には無理でも返事をしたためて、年賀状のやり取りを行うようになる場合もある（Aさん）。

大グループ⑤【一次予防の具体的な活動】のまとめと考察

SCの業務は面談が中心であることが【SCの日常業務】の項で示されたが、面談時間以外の

活動で、一次予防に関わる工夫が行われていた。生徒や保護者によるSCの認知度が、必ずしも高くないと認識されており、SCの存在を知ってもらうための活動が行われているとともに、その継続が必要であると思われる。SCから教師に相談等を持ちかけることも、逆に養護教諭や担任からSCに生徒の相談がまわされてくる場合もあった。その際、場所の近接等の物理的構造の影響も認められた。SCは相談室での面談のような閉じられた活動のみならず、授業参観等の学校行事に参加し、生徒の作品掲示を見てまわったり、休み時間に生徒に声をかけて交流するなど、相談室外での活動も積極的に行っていた。教師たちの親睦行事への参加は、SCと教師との繋がりの強化につながり、そういった場は普段関わりの薄い教師との交流の機会にもなると思われ、SCの活動の円滑化に寄与しているように思われた。一方、コロナ禍の影響でSCと生徒や教師との交流の機会は減っていると考えられ、たとえば給食の際の制限から、かつてのような交流の機会を持つことは難しいようである。

6. 大グループ⑥【一次予防の阻害要因】

【一次予防の阻害要因】は5つの中グループと14の小グループで構成されている。

6-1《SCの抱える時間的制約》

＜SC活動ができる時間＞

SCの活動時間について、Aさんが勤務している都市部の中学校は「280時間」であり、K県の中学校は「80時間」、公立高校は「年間40時間」と地域や学校の種類によって大きな差があった。

＜SCの勤務時間が短いと感じている＞

「（午後の出勤で）*昼休み面談をして，で，授業時間の間にできれば保護者の面談を入れるようにして，で，えーとまた放課後に生徒の面談*（中略）*まぁ面談と，報*（告）、*情報共有でまぁ4時間くらいはすぐ終わっちゃう感じです*」（Aさん）、「（相談業務後）*記録を書いたりとか，先生たちとお話したりすると大体1日の勤務が終わります*」（Bさん）、「（小学校は）*2週にいっぺんの短い時間くらいしか行けない感じ*」「*…小学校行ってる先生たちの話を聞いてると，ケース中心で，先生のフィードバックする時間がない，記録を書く時間がないっていうのは聞きますね*」（Cさん）。SC業務は「*慌ただしい仕事*」で、「*もうちょっと落ち着いてできるといいんだけどな*」（Aさん）という。SCの勤務時間の少なさは、業務全体を圧迫しており、一次予防活動がしにくい一因となっているだろう。＜学校行事に参加する＞の項目では、入学式への参加や校内テレビ放映での挨拶について、「*わざわざやるっていうのは，新しいところとか，時間が空いているときにしかやらない*」のであり、挨拶に時間を使うよりも「*先生たちは面接入れて*」と依頼してくることが多く（Cさん）、限られた時間を挨拶等に使うことが難しいという現状が示されていた。小学校のSCは、教師へのフィードバックもままならない状況である。

＜行事があってもSCは参加ができない＞

SCは面談が業務の中心であり、学校行事には「*ほとんど参加しないですね。曜日が合わない。*（中略）*行事があったとしても，大体ケースがどこの学校もたくさんケースが回ってくるので，*

行事参加してる，タイミングはそんなにない」（Cさん）というのが現状である。

＜勤務日の間に起こること＞
「（勤務日が）*いちいち1～2週間，間が空くので，学校ってすごく短いスパンでいろんなことが起きたり収束したりしてるので，まぁあの居ない間に何か起きてないか確認をしたりして*（後略）」（Aさん）と、学校の状況は常に目まぐるしく変わっている。

6-2《教師とコミュニケーションを取ることが難しい》
＜先生も時間がなく忙しい＞
「*とにかく先生方はどこの学校行ってももう忙殺されている感じ*」であり、例えばいじめ防止活動の一環としてのメール相談が高校生に「*馴染まない*」と感じても、「*変えるのにはエネルギーがいるので，先生方お忙しすぎて，そこまで手が回らない*」（Aさん）という状況である。

＜先生が職員室にいない＞
「（先生と）*コミュニケーションしたいんですけど，なんせ，先生が職員室にいない，っていう(笑い)*（中略）*まぁ小学校だと全くいないですけど，まぁ，中学校だったら多少，あの，教科の授業が入っていない時間に多少出入りがあるんですけど，それでもやっぱりあんまりいないので，結構，どうしても伝えたいことがある時は探しますね*」（Aさん）、「*…先生たち授業やってるから，会えるわけでもないですしね。基本的にね。空き時間，時間割を全部把握して，担任の先生とかどの時間だったら空いてるかなっていうところにケースが入ってないところで，直接，担任の先生と話をするとかっていうことが割と多いかなと思います*」（Cさん）という状況である。

6-3《SC活動の限界》
＜SCが関与できない＞
「（学校は）*人が集まっての話なので，組織を作ってもあんまり機能しなかったりとか，子どもの見方に対しての意見の対立があったりすると，スクールカウンセラーは強く関与できないから，逆に言えば，あんまりカウンセリングの活動も展開できずに終わる学校もありました*」といい、SCが話しやすい「*雰囲気とかね，そういうちょっと非言語的な情報もかなり左右される面もある*」と語られる。組織の在り方に関しては、学校のシステムづくりを担う教頭、校長の影響も大きいと指摘された（以上、Bさん）。また、教師が要配慮と認識していない子どもについては、「*カウンセラーは，大体面接びっしり入れられることが多いので，そこはわかんない，わかりにくいんですね*」（Cさん）と、関与の難しさがあると示された。

＜SC活動の効果が届きにくい＞
　高校でのいじめ防止活動の一環としてメール相談を受け付けていたが、高校生にはメールは「*馴染まない*」ため、「*あんまり来ない*」という。また、お便りにSCの勤務予定表を載せているが、「*生徒はあまり読まない*」ので「*伝わらない*」（以上、Aさん）。SC活動の効力を発揮して生徒に届けるのは、必ずしも容易ではないようである。

＜一次予防より三次予防の方が求められている＞

「…*スクールカウンセラーどっちかっていうと三次*（予防）*ですよね，三次になってから，依頼されるっていうパターンが多いですよね。なので，なかなかそこ*（一次予防活動）*までいかない，その前に，困っている人，この生徒何とかしてください担任が関わって，保護者も一回会ってもらえませんかっていう三次の方を，学校側がそちらのニーズの方が多いっていう印象ですね*」と、問題が深刻化した後の三次予防になってから、SCに依頼されることが多い。一次予防に関しては、例えば「…*自傷行為に関する，えーと理解とか，心理教育みたいなところを教職員が，学ぶっていうのも実際起きてからじゃないと，困らないからニーズがそんなにないんじゃないのかなっていうふうに思って。そこではそんなことが起きていない学校に，こういうことには，こうしておきましょうって言っても，あまり入らないし，あの，受けてくれないですよね*」（以上、Cさん）。

6-4《支援者同士の理解の差》

「…*先生たちの，んーと，障害や，特性とかの理解，病気の理解も含めてですけど，っていうあたりと，スクールカウンセラー，スクールカウンセラーも千差万別なんですけど，えー，理解と，あと，パートナーさんとか，学びのサポーターさんとかの，理解，に差があるんですね，結構*」ということがあり、支援者間での理解には、差異やずれが生じる場合がある。SCに可能な一次予防として、「*共有するとか，コンサルテーションしていく*」ような「*後方支援*」があり得る（以上、Cさん）。

6-5《学校の規模による違い》

学校の規模が一次予防活動のしやすさに影響していた。

＜大規模校と小規模校のクラス替えについて＞

大規模校では生徒同士の問題があると、「*物理的に離しちゃって少しクールダウンをはかるみたいなのができる*」が、小規模校では「*なんかあっても，こう，クラス替えってでき*」ず、他には「*担任の先生を変えるくらいしかできない*」。また、クラス替えをどう行うかは学校によって異なり、市町村によっては毎年行っている（以上、Aさん）。そういった場合には、大規模校同様にクラス替えによって、物理的な距離を取るという対処が可能だろう。

＜小規模校に対する印象＞

小規模校の生徒は「…*地域柄，幼稚園保育園から中学卒業までメンツが一切変わらないみたいな感じで。すごくあの，子ども同士の関係が濃いというか*」「…*外部の人がちょっと珍しい*」。そのため生徒には「*ちょっと人見知りさんも混じってる率が高いかな*」。中学校で「*小学校からちょっともめごと引きずってますみたいな，これは3年前の出来事で，3年前って小学校だよねーみたいな (笑い)*」という場合もある（以上、Aさん）。小規模校では狭い対人関係の中で「*全員当事者*」であり、大規模校に較べて対人関係が密接なものになりやすく、小規模校ならではの問題も生じ得る。しかし「*小規模校の方が，顔が見えるので，先生たちとのコミュニケーションが取りやすいことが多い*」（Bさん）のであり「*小規模だと色んな，それこそ一次予防的な活動も正直大規模校よりしやすい*」（Aさん）。学校の規模が、一次予防活動のしやすさに影響

を与えていると思われる。

＜小規模校・大規模校で行っている活動＞
「*小規模校だと中1ショックとか言いますけど，中1ーショックの解消目的に，こう，S，スクールカウンセラーっていう相談先がありますよっていうのを宣伝を兼ねて新1年生にちょっと授業するですとか，あと，超小規模校だとほんとに，生徒が学年で5，6人みたいなところがあって，そういうところだと，まぁ，何回かに分けて全員面接。何もないんだけど全員面接，こういう人いますよ，っていう*」。一方大規模校では「*面談の依頼なんかは多くなるので，それだけで手一杯みたいな状況*」になる（以上、Aさん）。また、「*小学校，超大規模校だと，時間内に終わらないくらい相談がいっぱいあって，大変*」であるという（Bさん）。全員面接のできる小規模校と、依頼面接で手一杯の大規模校の状況は、一次予防活動の観点から見ると対照的にも思える。

大グループ⑥【一次予防の阻害要因】のまとめと考察
勤務時間の短さが共通して語られており、SCの一次予防活動には勤務時間が大きく影響していると思われる。後述の【今後行いたい活動】では、幾つもの活動が挙げられつつも、時間的制約により実現は難しいという。勤務日の間が空くことで、変化の激しい学校現場の状況把握を毎回行う必要が生じ、それが負担となっていることも推測された。また＜先生も時間がなく忙しい＞ことから、SCと教師が充分にコミュニケーションを取り合う時間が確保できていないものと思われる。現状では、教師の担当授業時間割を把握した上で、情報共有等を行う時間を見出すといったようなスケジュール調整の能力が、SCには求められると考えられる。これらのことから、SCの勤務時間や勤務日数を増やすことで、一次予防活動がより活発になることは容易に想像できる。
また《学校の規模による違い》によって、一次予防活動の幅は大きく変わっていた。大規模校では面談件数が多く、それだけで手一杯となり、教師や生徒の顔が見えにくくなるという問題が生じていた。小規模校の方が活動がしやすいというSCの経験があることからすると、教師や生徒の顔が見えるということが一次予防活動のしやすさと関係していることが推測される。
一次予防のニーズについては、SCには問題が深刻化して後の介入である三次予防の方が求められるのだという。これは、実際に表面化している問題への対応の方が緊急性が高く、SCに関与してほしいという学校からの要望も強いことから、一次予防活動に向ける余力が持てないものと考えられる。

7. 大グループ⑦【学校の制度】
【学校の制度】は3の小グループで構成されている。

7-1＜学校の物理的な構造＞

「*学校によってはね，保健室と相談室がくっついてるところもある*」（Aさん）。「*大体，中学校が職員室が2階にあることが多くて，2階が，3年生の学年が多い*」ことから、「(3年生は）*自分の学年の教室がある階に，心の教室があるんで，違う階段から出て，玄関行って帰る*」ことがある（Cさん）。自分の教室が相談室と同じ階にある場合、相談室の行き帰りに他の生徒の目が気になることもあると思われ、こういったことから学校の構造や部屋の位置により、相談室の利用しやすさが影響を受けるものと考えられる。

7-2＜学校間による違い＞

【SCの日常業務】で、SCの活動は相談業務が中心であることを示したが、中には「*コンサルティングをメインに活動する学校もある*」（Bさん）。また、相談室登校については「*まぁ学校によりますけど。ずいぶん違いますね*」（Cさん）と述べられ、その内容は様々であることが推測される。

7-3＜高校のシステムについて＞

高校によっては校内支援用SNSを整備しており、「*メッセージのやりとりとか，その日の予定とか*」を見ることができるものの、その中にSCが入れてもらっていない場合もある。そのため連絡は「*口頭か，メモ*」もしくは「*…教頭先生に，こう，伝えておいてくださいみたいな感じで，伝達…*」という手段で行うという（Aさん）。

大グループ⑦【学校の制度】のまとめと考察

学校の規模や物理的構造等により、SCの活動のしやすさは変化していた。その学校の特徴から起こりうる事態を想定して活動することは、有効であろうと思われる。学校運営用の支援システムにSCが加われない場合があり、これはSCに学外の専門家という役割があることが一因かもしれない。しかし、教員との連絡の難しさが述べられていることから考えて、SCが校内支援用SNSに参加することは認められるべきであると思える。学校による別室登校用教室の機能の違いが、SCがそこで行うべき活動に戸惑う一因となっている可能性がある。別室登校用教室には、学習サポーター等の、SCとは異職種の支援者がおり、SCには連携と臨機応変にその学校のニーズに応えようとする姿勢が求められよう。

8．大グループ⑧【一次予防の印象】

【一次予防の印象】は4つの小グループで構成されている。

8-1＜学校の現場では出てこない言葉＞＜一次予防に対するプラスのイメージ＞＜一次予防の優先度は低い＞

一次予防は「*あまり学校で聞く言葉ではない*」のであり、学校心理学用語、公認心理師試験に出てくる用語といった印象で、「*まぁ心理教育，とか，具体的な話ですね，あの。自殺予防の授業したいとか*」「*…中1ショックの予防で，とか。SOSを出せるようになるように…*」と、学校現場で一次予防に該当する具体例が示された（Aさん）。

一方で、「*もう不登校になってからでは遅いっていう思いがあって、予防的な活動が必要だなって思っていて、活動をしています*」「*…色んな活動、一次的、予防活動、すごく大事だと思うので、しかもやっぱりそれがあのそこだけで終わるんじゃなくて、スクールカウンセラーのいい所はそのそこからやっぱり相談に繋がっていくっていう流れができるっていうことが、とっても仕事の醍醐味として、面白いと思うので、そこの部分についてやってきたことが少し光を当てていただいて、感謝の気持ち*」と一次予防を非常に肯定的にとらえ、SCを始めた当初から予防的な活動を「*かなり意識して*」行っているという場合もある（Bさん）。

また、一次予防に対して「*なかなか難しいよなぁ*」、「*スクールカウンセラーどっちかっていうと三次ですよね、三次になってから、依頼されるっていうパターンが多い*」、「*…スクールカウンセラーが、一次予防を、進めていくっていう在り方自体は悪くはないんですけれど、学校が、何を求めているかの方が大事で、求めてるものに対してこちらが提供できるかっていうことがあった上でじゃないと、これらのことは、難しいと思います。なので、何か、トップダウンで一次予防に関してもっとやっていきましょうってことがあるんだとしたら、ここまでやんなきゃいけなくなったってやると思うんですけど、そうじゃない時には、*（中略）*その時に必要とされているものっていうところの、えーと提供ができた後じゃないと難しいんじゃないかなっていう気がします*」という認識もあった。学校の求めるものに応えた上でないと、一次予防は行えないという指摘である。そして一次予防は、「*実際起きてからじゃないと、困らないからニーズがそんなにない*」と、＜一次予防の優先度は低い＞という認識が示された（Cさん）。

8-2＜SCの考える一次予防＞

「*…学校心理学は大学時代、大学院とやってきていて、その中で*（一次予防について）*多分授業で聞いてはいたので、あのそんなに聞き馴染みがないっていうことはなかったです。学校なんで、その疾病、治療ではないのかなって。あの、診断でもないから、あの、どちらかというとその、疾病理解というよりも、問題として顕在化するっていう理解でいたように思います*」（Bさん）。これは学校の場で問題として現れないように予防することが一次予防であるという理解であろう。また、「*あれと一緒ですね、えーと。災害、の支援と一緒ですね。こういうときにこんな反応が起きるのはそんな不思議なことじゃないよって心理教育してくわけじゃないですか、伝えていくっていうのと同じで、こういう時期にはこんなことが起きやすいよねっていうのを伝えるっていう*」（Cさん）と、一次予防は生徒、保護者、教師が混乱しないよう心理教育を行うことだという認識もある。そして「*ただ実際の、予防となると、やっぱり現場が一番情報量持っているっていうのが私の考えです。なので、そのことと、私が経験してる、持ってる知識とはどんな風に結びついて、そのことを、えーと直接ではなく、後方支援としてサポートできるかってあたりのところが、重要かなって、それが現実的じゃないかなっていうふうに思いますね*」（Cさん）と、現場の教師の豊富な経験をSCの専門知識とどう結びつけるかということ、および後方支援として行うことの重要さが示された。

大グループ⑧【一次予防の印象】のまとめと考察

一次予防の定義が広く曖昧になりつつあることは序論でも述べたが、SCたちの一次予防についての見方も同じものではなかった。その見方の違いは、SCとしての活動に影響を与え、

SCが一次予防という意識を持っているかどうか自体が、活動に変化をもたらすように思われた。一次予防という言葉は現場ではほとんど聞かれない、あまり馴染みのない言葉のようであることから、実際の活動に際しては具体的な、たとえば心理教育のような形で行われており、その方が学校からも受け容れられやすいように思われる。そして、SCによる一次予防活動は、その基礎となる情報を直接収集するのではなく、すでに「現場」の教師等が蓄積している豊富な情報をSCの専門知識と結び付ける形での、「後方支援」的なコンサルテーションが現実的であると示唆された。

大グループ⑨【今後行いたい活動】

【今後行いたい活動】は3つの小グループで構成されている。

9-1＜余力があればやりたいこと＞

SCが常勤職となったり、勤務時間がもっと長くなった場合を想定しての希望である。

「…*相談室開放してまぁ自由に，昼休みとか，放課後とか自由に出入りできるみたいなのは，なかなかで，そこまで届かないんだよなぁっていうのがあって。そういう気軽な開放ができたらいいけど*」（Aさん）。「（規模の大きい学校では）*事務的な話ししかなかなかできなくて，コミュニケーションが難しくなるんですけど，窓口の先生がまた別にいて細かな情報を共有してもらえるとすごくいいんじゃないかなと思ってます*」、「…*先生たちと子どもの発達段階に応じた関わりの工夫とかを色々細かいところでお話できたら，いいなって思うし，まぁ小学校の相談実数が少ないので，子どもの話ももっと聞けるといいなと思います*」（Bさん）。

9-2＜授業を行うときにやりたいこと＞

「*私はできればクラスごとにやりたい*」（Aさん）、「*最低でもクラス単位でやりたい*」（Bさん）。その理由としては「（心理教育は）*内容的にやっぱりすごく抽象的なことが多くなってしまうので，出来たら人数が少ない方が伝わりやすいなと思っていますね*」（Bさん）。さらには「（常勤になったら）*もっと，こうそういうシステマティックに系統だってストレスに関して，一学年に1時間とかの授業じゃなくて，なんか，3，4回に分けてとか。色々お話したいところではあるし，小学校は結構やっぱり保護者の対応によって子どものメンタルヘルスが左右するので，保護者向けの講演とかを充実させていろんなテーマでやっていきたいと思います*」。心理教育としての授業を、少人数に対して、ある程度まとまった時間を使って系統だった内容で行い、小学校では子どもの精神面への影響が大きい保護者向けの講演等を充実させたい、という願いである。

9-3＜研修を増やしたい＞

「（今後行いたい活動は）*生徒向けと，教員向けの，研修。心理教育的なアプローチとか，だったりかなって思います*」（Cさん）。

大グループ⑨【今後行いたい活動】のまとめと考察

具体的に行いたい活動として、相談室の開放、教師達から子どもの話をもっと聞ける場所や

時間の確保、授業や研修を充実させること、が挙げられた。心理教育としての授業や研修は、少人数による効果が認識されていた。しかしこれらのことは、現状では勤務時間が短いことによる時間的制約により、実現は容易ではなさそうであった。

各グループ間の関係

KJ法の図解化から得られた全体の関係性について、関係図（図2）をもとに考察を行う。以下では、大グループを【】、中グループを《》、小グループを＜＞で示す。

・《SCの抱える時間的制約》と＜SCの勤務時間について＞

この二つは相互に関係があると考えられる。学校のある地域や、小・中学校、高校、私立や公立など学校の種類によって＜SCの勤務時間＞が定められている。SCは勤務時間を短いと感じていて《時間的制約》を抱えており、また勤務日の間が空くことで、毎回、学校の状況が変化しており、その把握のための負担がSCの活動の妨げとなっているように思えた。勤務時間が増えることにより、SCによる一次予防活動が活発化する可能性があるだろう。

・＜先生や相談支援パートナーとの考え方の差＞と【学校関係者との関係】

この二つは関係が深いと考えられる。SCの活動には担任をはじめ、養護教諭、教頭、校長、心のサポーターや学習サポーターなど多くの【学校関係者との関係】づくりが必須であるが、＜先生や相談支援パートナーとの考え方の差＞があって、認識にずれがあると支援が円滑にいかない。情報共有やコンサルテーション、SCの理解を伝えること等により共通認識を形成しようとすることが、一次予防活動に寄与すると考えられる。

・《先生とコミュニケーションを取ることが難しい》と＜先生への報告の方法＞

この二つは原因と結果の関係にあると考えられる。小学校では担任が全教科を教えるため職員室にいないことが多く、《先生とコミュニケーションを取ることが難しい》ため、SCは、先生を探す、先生の時間割を把握して連絡を取れる時間を見つける等の工夫を行っていた。

・＜一次予防より三次予防の方が求められる＞と＜一次予防の優先度は低い＞

この二つは原因と結果の関係にあると考えられる。学校からは問題が深刻化した後の介入である三次予防がSCに要請されることが多く、それに応えることが優先されるため、まだ問題が表面化していない状態での介入である＜一次予防の優先度は低い＞。一次予防活動が消極的になる一因になり得ると思われる。

・＜職員室に机があると嬉しい＞と＜SCに対する学校の配慮＞

この2つは関係が深いと考えられる。SCの机が職員室にあると、教師との情報共有や報告等が行いやすく、＜職員室に机があると嬉しい＞。＜SCに対する学校の配慮＞により職員室に机が用意される場合もある一方で、学校の物理的条件によりそれができない場合や、SCの机が別の部屋に置かれる場合もある。SCの積極的な要望により、相席という形であれ職員室に机を用意してもらえる場合が多いことは示された。

・《学校の規模による違い》と【学校の制度】

この2つは関係が深いと考えられる。教室、職員室、相談室、保健室の位置等の＜学校の物理的な構造＞を含む【学校の制度】によって、相談室の利用のしやすさは変わってくる。また同様に、ある種、物理的な条件である《学校の規模による違い》も、一次予防活動のしやすさや行い得る活動の内容に、影響を与えている。

5. 総合考察

5-1　SCは一次予防として学校にどのように寄与できるか

学校における一次予防活動にSCが寄与する際の基礎となるのは、他の学校関係者との関係づくりであると思われた。関係ができていることにより、SCを資源として使ってもらいやすくなる、SCのコンサルテーションによる教師等からの早期介入が行われやすくなる、深刻化する前に生徒にSCにつながってもらいやすい、等の効果が期待できるからである。関係づくりのためには、日常会話を積極的に行うこと、多忙な教員との連絡手段を工夫すること、SCと教師とをつなぐ役割を担う教頭や学校事情に通じている養護教諭との連絡や情報共有を密にすること、などが有効である。また親睦会等のインフォーマルな場への参加も役に立つ。

学校においてSCの存在の認知度が高くない可能性があり、生徒への宣伝活動によりSCという支援の資源があることを認識してもらい、その利用を促進することで、一次予防への寄与となり得ると考えられる。

また、いつでもSCに相談できるような体制づくりは、一次予防活動の促進につながり得る。SCの常勤化が難しい場合も、複数のSCの交代勤務を実践している高校もあり、これは有効な手段と思われた。その場合は、SC同士の情報共有のような課題も生じ得る。

現状ではSCの業務は面談が大半を占め、業務時間が足りないという制約があった。教師との日常会話を積極的に行う等の、比較的実行しやすいことから工夫することが、現実的かもしれない。

SC常勤化の動き

SCの常勤化の動きは近年注目されつつある。名古屋市では平成26年度からSCの常勤化を目指した「なごや子ども応援委員会」の事業が開始され、平成31年度には市立中学校110校に常勤のSCが配置されている。名古屋市ではSCの常勤化のメリットとして、学校問題が発生したときの即時対応が可能であることや、朝生徒の登校場面などに立ち会えることから心理的距離が近くなり学校問題の予防にもつながると述べている。

また、スクールカウンセラー等活用事業実践活動事例集（文部科学省　2022）によると、北海道では地域によってはSCの確保が困難であるという問題に対し、オンラインでのカウンセリングによる支援が出来るような制度を整えていく提唱が行われている。オンラインでのカウンセリングは遠くの地域に支援を届けるだけでなく、移動時間の短縮というメリットなどもある。また、カウンセリングのみならず、オンライン会議などに参加することができれば教師と連携を取ることも可能なため、一次予防の支援の一つの手段として考えても良いだろう。

現在、文部科学省（2024）はSCとスクールソーシャルワーカー（SSW）の常勤化に向けて調査を行っている。SCが常勤化になると相談件数が増えることや、会議への参加率が上がり、専門的な助言を行うことができるなどの多くのメリットが挙げられていることから、今後SCが常勤化の動きが広がることによって活動時間の確保がなされ、一次予防の活動がより活発になると考えられる。

5-2　一次予防活動を困難にする要因

SCの時間的制約

【一次予防の阻害要因】として出てきたSCの勤務時間の制約が一次予防の活動に対し大きな影響があることが示唆された。SCの時間の制約上、学校からのニーズがあっても予防支援が行いにくくなっていることは以前から問題視されていたが（荒木　2007など）、現在でも解決されていない課題であることが示された。今後のSC活動の充実に向けて、常勤化の動きは積極的に行うべきであると考えられる。

一次予防のニーズについて

谷口（2009）や石隈（1999）などは、SCは二次・三次予防の担い手になりやすいことを述べている。今回のインタビュー調査でも、問題が発生してからの対応などの二次・三次予防が主な業務であった。一次予防は問題が発生することを未然に防ぐための支援であるものの、問題が実際に発生しないと受け入れられにくいという課題が示唆された。SCは学校が求めているニーズに対応しつつ、一次予防の活動を受け入れてもらうためには、前述したような先生との関係づくりが重要になってくると考えられる。

5-3　一次予防の捉え方

一次予防は見えにくい支援

SCの業務の中心である相談業務が勤務時間の大半を占めることから、SCはクラスの様子や教員の配慮対象に入っていない生徒が見えない状況であることが示唆された。そのためSCは、現場の情報を収集し、それに対する自分の知識や理解を伝えて行くコンサルテーションのような、地道で見えにくい支援を行うことが必要になってくる。

一次予防を災害支援をモデルに考える

一次予防は災害支援と同様であるという視点を与えられた。防災活動の一つとして、自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図に示したハザードマップの作成がある。それにより被害が大きくなり得る地域等を事前に把握することができ、実際の災害時に迅速な避難が可能になる。一次予防でも同様に、生徒のライフサイクルをもとにして不安定になりやすい時期や、学校問題が起きやすい時期を示すことが、問題発生の予防と対処に有効であると考えられる。今回の調査では、教師が一次予防を知識として知っていることは示されたが、日常の活動の中で一次予防を意識しているかどうかはわからなかった。もし教師が学校における日常の活

動の中で一次予防を意識していないならば、SCが一次予防を念頭に置いた活動を示唆してゆくことが、一次予防活動に寄与すると考えられる。

本研究の課題や今後の展望

本研究の協力者は、全員がSC経験10年以上であり、豊富な経験を持っている。SCによる予防的取り組みに関して調査した小高（2018）は、SCの予防実践が滞るのは、SC自身の予防教育に関する知識や実践のためのスキルが不足しているからであると示唆している。今後は初任者のSCの一次予防活動について明らかにしていきたい。

SCと教師の信頼関係をつくってゆくことで、教師がSCに話しかけやすくなり、相談を受ける頻度が上がることが示され、教師を含む学校関係者との関係づくりが実際に一次予防活動を行ってゆく際に重要であることが示唆された。教師とどう信頼関係をつくってゆくかの実際や、SCが学校に馴染んでゆく過程などを明らかにすることで、SCが一次予防に寄与できる点を見出せる可能性があるように思う。

最後に、今回の調査は対象者数がデータが飽和するには少なく、結果は仮説的なものにとどまる。調査対象者をさらに増やして、より信頼性のある結果を求めてゆくことが必要である。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきましたAさん、Bさん、Cさんに心より感謝します。ご多忙にも関わらず本研究のインタビューに真摯に向き合って下さったこと、重ねて感謝申し上げます。また、北海道大学大学院教育学院非常勤講師の志保井優子先生には本研究のあり方や進め方について大変有益なご助言をいただきました。有難うございます。

そして、執筆にあたり私を支えてくれた北海道大学大学院教育学院の同期の皆さん、ゼミの検討に参加して下さった教育臨床心理学ゼミの皆さん、お忙しい中、本論文のもととなる修士学位論文の副査を快くお引き受けくださいました同大学院の安達潤先生と加藤弘通先生に心より感謝いたします。

引用参考文献

荒木史代（2007）スクールカウンセラーに対する教師のニーズ　千葉大学教育学部研究紀要，55，87-95

荒木史代・中澤潤（2008）予防的支援における教師の実践とスクールカウンセラーに対するニーズ，千葉大学教育学部研究紀要，56，93-103

Caplan, G著，新福尚武監訳（1970）予防精神医学，朝倉書店

石川悦子（2015）スクールカウンセラーの役割と活動の在り方，文部科学省第4回中央教育審議会チーム学校作業部会提出資料

石隈利紀（1999）学校心理学　教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス，誠信書房

伊藤亜矢子（2009）学校臨床心理学－学校という場を生かした支援－（改定版），北樹出版
伊藤美奈子（1999）スクールカウンセラーによる学校臨床実践評価ならびに学校要因との関連，教育心理学研究，47，521-529
川喜田二郎（1967）発想法，中公新書
川喜田二郎（1970）続・発想法，中公新書
小高佐友里（2018）児童生徒の問題行動に対するスクールカウンセラーの予防的取り組み－現状と実現への課題－，法政大学大学院紀要，81，29-35
小高佐友里（2021）スクールカウンセラーの活動状況と予防につながる取り組みの検討，法政大学大学院紀要，87，61-72
三島美島（2006）スクールカウンセラーによる学級集団づくりに悩む担当教師への支援－「教師用RCRT」・〈学級雰囲気〉質問紙を用いて－　神戸常盤短期大学紀要，28，17-25
水谷章一・高原晋一 名古屋市における学校援助職の常勤化，名古屋市ホームページ，https://www.city.nagoya.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000074/74050/gakkouennzyosyokunozyoukinnka.pdf，（2023.12.20参照）
文部科学省（2023）スクールカウンセラーについて．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/066/gaiyou/attach/1369846.htm
文部科学省（2024）スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの常勤化に向けた調査研究，令和5年度いじめ対策・不登校支援等推進事業報告書．
Murray Levine and David V. Perkins（1987）Principles of Community Psychology -Perspectives and Applications-, Oxford university press
鈴木真之（2005）学校現場における1次予防プログラム導入の可能性の検討－従来の学校教育と新たなプログラムとの親和性の観点から－，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要・心理発達科学，52，183-197
田中勝則（2010）教員とスクールカウンセラーの協働促進要因についての教育心理学的研究，教育実践総合センター紀要，9，33-41
田中博晃（2010）KJ法入門：質的データ分析法としてKJ法を行う前に，「より良い外国語教育研究のための方法」，外国語教育メディア学会（LET）関西支部メソドロジー研究部会2010年度報告論集，17-29
田中博晃（2012）KJ法クイックマニュアル，外国語教育メディア学会（LET）関西支部 メソドロジー研究部会，年度報告論集，102-106
谷口弘仁（2009）学校カウンセリング－教師とスクールカウンセラーの接点－，おうふう
山本和郎（1986）コミュニティ心理学－地域臨床の理論と実際－，東京大学出版会
吉澤佳代子（2009）中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価，福岡県立大学人間社会学部紀要，17(2)，47-65

Abstract

The contribution of school counselors（SCs）to the primary prevention of psychological problems in schools was examined based on a qualitative study of SCs and the current situation as indicated by the results of the study. The primary prevention activities of the SCs were

logistical in nature, with the main activities being relationship building with teachers, advertising activities, and consultation. The primary prevention activities were conducted with various ingenuity, although it was quite difficult to conduct them under the constraints of working hours and the school's request to conduct tertiary prevention（interviewing）. The SCs are extremely busy, and it is highly desirable to have full-time SCs. However, it is believed that the steady activities with various ingenuity will promote primary prevention.

付記

本論文は、筆者の一人である三浦が北海道大学大学院教育学院に提出した2024年度修士論文に、加筆したものである。